

【灯】 「お札の話」
<2023/5/8 大分合同新聞掲載>

1万円札といえば福沢諭吉という時代が長く続きましたが、2024年度上期に新シリーズのお札が発行される予定です。

ところで1万円札はなぜ1万円の価値を持つのでしょうか。いくら法令上の定めがあるといってみても、例えばソ連崩壊後のように、人々が価値を認めなくなってしまったら、お札はお札としての機能を失います。「この紙には1万円の価値がある」とみんなが信じているからこそ、その紙は1万円たり得る。トートロジーかある種の神話か、お札はとても不思議な存在だと思います。

国立印刷局で造られた新品のお札は、日銀から金融機関を経由して世の中に出回ります。お店や自動販売機などで使用されるうちに、汚れやしわが目立つようになったお札は、金融機関から日銀に持ち込まれてその生涯を終えます。日銀では、汚くなったお札を機械にかけて、真偽鑑定から裁断まで一貫処理するのですが、テープで貼り合わせたものや油汚れのひどいものは機械で扱えず、手作業で鑑定してからシュレッダーにかけます。一歩外に持ち出せば1万円の価値がある紙を淡々と裁断する日銀職員。その姿は、第三者の目にはかなり奇異に映ることでしょう。

でも、そんなわれわれも家に帰れば一人の市民。子どもが誤って家のお金を切り刻んだりしたら、断末魔のような悲鳴を上げることは間違いありません。（日本銀行大分支店長）